本会元理事長　小葉田　淳先生を偲ぶ

本会元理事長、京都大学名誉教授、文学博士、小葉田淳先生は、二〇〇一年八月八日、急性循環不全のため京都市左京区の病院で逝去された。享年九六歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は一九〇五年（明治三八）四月二四日、福井県坂井郡丸岡町にお生まれになり、福井中学校、第四高等学校を経て、一九二五年（大正一四）四月京都帝国大学文学部史学科に入学、三浦周行教授のもとで国史学を学び、一九二八年（昭和三）三月に卒業された。一九三三年四月台北帝国大学文政学部講師に就任、同年一〇月助教授に昇進され、以来台湾の地で研究・教育に精励し、数多くの著作を上梓された。しかし太平洋戦争末期には臨時召集を受け、また内地に帰還させようとした御家族を失うなどの辛苦を重ねられた。一九四五年八月の敗戦により、中華民国政府に国立台湾大学副教授として留用されたが、四六年一二月解除となり、すべての研究資料類を彼地に残して帰国された。

戦争により「一切を喪つた独り身」となって雪の福井に戻られた先生であったが、まもなく研究生活を再開され、一九四七年三月に京都帝国大学文学部講師を嘱託された。同年四月東京文理科大学文学部講師、六月には同学部教授となられ、戦後混乱時の学生指導に情熱を注がれた。さらに四九年一一月には京都大学文学部教授に就任し、国史研究室を再建されたが、五三年三月の東京文理科大学の閉学までは同大学教授を併任し、京都と東京を往還して講義を続けられた。京都大学では国史学第一講座を担任して主に日本近世史を講じ、幾多の俊英を育てられた。

この間、先生は京都大学評議員としても活躍され、さらに諸学会の役職をかねて学界の振興に努められた。本会への功績も大きく、一九五一年から永く評議員・理事を務められ、六六年四月から翌六七年三月までは理事長として会の発展に尽力された。

一九六九年三月、先生は停年により京都大学を退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官とともに龍谷大学文学部教授に迎えられ、七一年四月京都女子大学文学部教授に転じ、七六年三月の退職まで日本史学を教えられた。その前年の七五年一一月に勲二等瑞宝章を受章され、七六年一一月日本学士院会員と

なられた。一九八一年に冷泉時雨亭文庫常務理事、八二年泉屋博古館理事、八六年京都文化財団常務理事に就任され、八七年一〇月からは住友史料館館長をつとめられた。さらに一九九六年（平成八）一一月文化功労者に選ばれ、九八年四月に住友史料館名誉館長、二〇〇〇年七月に泉屋博古館顧問となられた。

先生の御専門は日本史学であり、殊に貨幣流通史、対外交渉史、鉱山史の各分野において、まさに前人未踏の成果をあげられた。日本語史料のみならず、広く中国・朝鮮・沖縄の諸文献にも通暁され、また農山漁村に埋もれた古文書・古記録を精力的に発掘された。先生はこうした史料を縦横に用いて実証的研究を進め、常に清新な論説を学界に送り続けられたのである。

発表された著書・論文は枚挙にいとまがないが、代表的なものとして『日本鉱山史の研究』がある。本書は日本の鉱山史に関する最初の体系的著作で、一六～一七世紀において世界史的意義を有した日本の金・銀の実態を国際的視点から初めて解明したものである。その学術的価値の大きさに対し、一九六九年日本学士院賞が贈られた。また『中世日支通交貿易史の研究』は勘合貿易制度とその運用を彼我の史料を博捜して論じ、『中世南島通交貿易史の研究』は琉球を中心とした東アジアの通交貿易を究明し、さらに『金銀貿易史の研究』は一六～一七世紀東アジアにおける金・銀の流通の実態を明らかにしたものである。いずれも日本という枠組みにとらわれない広い視野をもち、行き届いた史料調査に基づく実証的手法によってなされた研究であり、当該分野における最高の成果として国際的にも高く評価されている。

先生は研究と並行して、発掘した史料を様々なかたちで公刊された。一五～一九世紀琉球王朝の外交文書集である『歴代宝案』はその代表的なもので、先生は沖縄県立図書館でこれを発見して学界に衝撃を与え、沖縄県による刊行にあたっては陣頭に立って翻刻を進められた。また『堺市史』『敦賀市史』『福井県史』など数多くの自治体史編纂を主導し、『若狭漁村史料』『住友史料叢書』といった基礎史料の刊行にも尽力された。

先生はこのように意欲的・野心的に研究を進められたが、しかし決して自らを誇ったり飾ったりされることはなく、いつも物静かに、暖かく門下生たちを見守られてきた。日本史研究室の読史会は一九一一年より続いているが、途中しばし中断し、一九八五年に再開された。その年は先生に記念講演をお願いしたが、諄々たる講説にはみな感銘を受け、かつ襟を正したことであった。以来、秋の大会には必ずお見えになり、朝から夕方まで会場最前列で若手の研究報告をお聞きくださっていた。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる。

（吉川真司記）